山満多山

下

#11
Hokusai
(3)

191

栢戸吉

ゑほどに
ころくもて
うちおとす
あきしくを
もる
山の名の
きし

赤都保成

今ふるく祖師の
はうすのうちらくよしも
大の月ふるきまろ
新関やや名

阪上登

雛しりや三弐の
庭にも屑りぎもし
紅梅も見ても
皆倍妙法

味酒之晴丸

拝いちり猶いこそ楽
もらしし

雨雲の
おもし
風車なり

年常持

會ぶそし之を
扇月子の
よしさ使も
きすしらえもる
新関谷道

月蔵人

新関の門を～しさま
まる花のもりよ
まりみちく
木の実
嵐し

紅葉笠成

梅の坊より
立まさる
紅葉その
木風にかゝる
西向天神

味々覚丸

神垣の
紅葉の赤き
加へつゝ時雨よ
染めてく染む
くれなゐ染

新道文弓

神かきの梢
あかく
紅照らす

ともに千歳なる
山の端

九久友
坂戸門

さくらの
入れ紅山も
色づきて
朱になす
秋の
江なり

梅有原

西向の社へ人の
夕紅葉
まゐりくる
日も
赤けの

歯刃又廣

とけにあらそ
くもゐの神垣に
三百ならへて
あらしや
はらふらん
縄 鄭平

ふり上りふり
帯代とさはま
中より余集い
うしろみ
ます
操琴舎
芳風

赤国のならぬ
社の
深元

白きのの
あさまき
ころ
部絹藏持

おりけの綱は
はやりしく
うら車からや
赤坂の坂を
おしあふ
常世庵
良満

けふ狐ん
赤坂の山の
猿はいひ
紅葉の錦
きしく 摂之亟

千曲門風

こえてゆく
諏訪の湖ハ
うしろから
神の恵の厚さを
こほり

稲葉芳公同

渡りいわたるゝ
まゝの厚氷
すまじく天下一の
こほりかな

沖猶団

明松からもしく
諏訪の
山朝

岱のうかしハ
とえな
おかるかし

思笑庵人

手まねきの
諏訪かうしろの
もゝ氷のうへを
わたる旅人

豊出来秋

氷のうへわたるにも
こゝろの過る
うしろかな
諏訪の
湖

紀西茶多

十二支の牛込さかや こがねの
とらの縁日 毘沙門天王

山中里近

毘沙門へ百足参りて
千度ゝりし
とらの日毎の縁日

江津々丸

京江戸の人ハ
まちかく
十文字

ほとり立つる
ひさごんの気

花寳園
玲成

京江戸もまり
とらの縁日は
おしはふきまる
はなし
花子

丸梅角面

ほうきの
一もとめて
そうしへむきての
ありのままさ
京江戸

千代古道

了咲の濱ゝたまて
もらひしのまるし
ねまりつけたる
御膳の梅

萩弓人

ぬるやよりてとらまし
まきしの
ありいらきさまして
手まりけた梅の
紫ひ

亀谷
宏音

春かきさ
门あふ庭の
袖垣て

ほころひて
白き梅香

月好雄

としとしもとせるし
ふたるの植木やの
はるすむすこときて
梅の花咲

酔相枝

埋火のあたりに
ゐるしぐらつん
あるあふらりて
さくいろの
梅

蘭齋亭
香保留

牛渕亭
服道

酔月庵夢馬

まろくなす人やとむらん
あきん人の
はかりける
しきの紋

小家磨須

秋草のかゝりて
ときあかる
中

月立かゝう
いつかけ
市子

禁滝道

三芳野の
のきよの露風
とゝのえて

霜のとゞる
人のふり坂

柏仲住

このもとのさそら
のしのおく深
みしめする
君のたち

荒田袖麿

枯すゝき紅葉
ふり坂よ
是磨足道
し
人や
あのもん

便々館
湖鯉鮒

まろき須む
膳のうちも
うつくしく
やちる春
まり
ためし
あるらん
し

大原亭
炭方

獅子まひく
笛吹うし
ろうき
しの尾よ
魚代
はつき
なるなり
なし

阿し哉の山乃よなる景地とさゝれ
西ハ北斎先人ゟ例のふんてを嬶し
たる狂歌をハ我のれ炭方便ゝ鍍
せうよお継してこ狂を撰ゝ梓よ
こ川の冊子と索せりこれや山
姥ゟ山めくりよる心ちせしもつもく
ことてる斧の柄のくちもくし
巻の志わへよ志るしをかん

大泉亭
炭方

享和四甲子初春
東都書房
通油町南側
蔦屋重三郎梓